Vol.56
No. 02

Text ▶ 稲葉俊郎

Title ▶

創造して生きる 芸術と医療

画＝稲葉哲郎

医療現場で臨床に携わっていると、短期的にも長期的にも人が変化し治癒していくプロセスを数多く経験します。果たして、それはどういうプロセスなのでしょうか。

人は、誰もが「寝て起きる」を毎日繰り返しながら人生を生きる必要がある存在です。自分は子どもの時、「なぜ人は無防備で危険極まりない『寝る』状態が必要なのか」と強く疑問に思ったことを覚えています。今でも謎は深まるばかりですが、自分なりに考えてわかったことは、動物などの動く生き物は「眠り」により全体性を回復しながら生きないと、いのち全体の調和が損なわれてしまう、ということです。静寂・静けさ・静止・沈黙・止まる・休む、などの行為は全体性を成立させる重要な要素ですが、速く動き続けることが重視される現代社会で忘れられやすいものです。

芸術での創造行為は、そうした失われた全体性を取り戻すプロセスとして、いのちの深い場所から生まれてくるものだと思います。全体性の中には、人間の全体性、体や心の全体性など、いのちを構成するさまざまな全体性が含まれています。

生きていると、矛盾や葛藤を日々経験します。受け入れがたいことを受け入れていくプロセスは人生全体の中で進行していくものですが、人間が全体性を持って成長して生きていくためにとても大切な時期です。だからこそ安易に解決した気にならず、矛盾や葛藤を抱きかかえながら生きていくことこそが、矛盾を「自分」の器の中に位置づけていくために大事なことです。それは、一見すると大変な苦労を伴い、大量の心的エネルギーを使います。周囲からは停滞して先に進んでいないように見えますが、内的世界では大量の心的エネルギーが使われ、深い場所でいのちの再創造が進行しています。外的に創造という表現で花開いた時、自分の全体性は回復され、自分自身を癒す力が生まれます。自分が引き受けた課題の大きさに従って、自分自身を癒すだけではなく、その創造物が他者や時代をも癒すものになることがあります。創造のプロセスすべてが「質」として顕在化します。「質」は「量」と異なり、計測できないものです。

自分は「民藝」という精神のムーブメントに深く共感しています。民藝運動は、1926年（大正15年）に、柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らによって提唱されました。名もなき職人から生み出された日常の生活道具を「民藝（民衆的工芸）」と名づけ、美は生活の中にあることを指摘しました。民藝が伝えている本質は、「人は誰でも美の生産者である」ということです。美を「消費」だけ行い生きるのではなく、誰もが美の「生産者」としての誇りを持ち生きることが大切なことです。資本主義の欠点は、すべてのものを消費の対象とし、人を消費者だけの存在にしていくことで、生産者への敬意を失っていった方向性にこそあるのだと思います。

芸術において大事なことは、まず自分自身の全体性を取り戻すものだ、ということです。個を深めれば、普遍にも通じていく道が開けるのです。

ただ、子どもの時に他者からの評価にばかり慣れてしまうと、誰かの評価と関係なく自分自身の感性で自由に表現することに強い恐れを持ってしまいます。「自分は絵や音楽や芸術のセンスがないんだ」と合理化することで、創造や表現へ続くドアを自分自身で閉めてしまうのです。

「創造」という行為は、失われた全体性を回復するプロセスです。それは極めて個人的なものであり、誰かが評価することは極めて困難です。自分のいいところも悪いところも含め、人間性全体・人格全体を含めた表現になります。光だけでも、闇だけでも不十分です。その両方を含みながら全体性の中に体現されていることこそが必要なのです。

生きる人生そのものが「わたし」の統合化、全体性の連続です。そこには生も死も光も闇も、矛盾が矛盾のままとしてすべてが包含されています。

芸術も医療も、失われた全体性を取り戻すプロセスであるため、方法論は違って見えても同じ地平に存在しています。「生きる」という表現はどんな人でも日々行っています。それは、日々を創造し、自分自身を創造しながら生きていくことです。「生きる」こと自体は単調で退屈なものではありません。オート操縦からマニュアル操縦へと切り替え、日々を創造し発見しながら生きること。子どもの目を持って、日々が人生最後の日だと思いながら。死を生の中に位置づけて生きれば、死と生は矛盾なく両立します。全体性を持って生きることは、自己治癒としての医療の側面を持ちながら、人生そのものが個人の創造行為としての芸術作品そのものにもなるのです。そうした生きる後ろ姿にこそ我々は感動し、勇気や希望をもらうのです。

Profile

稲葉俊郎

いなばとしろう。医師。東京大学医学部付属病院循環器内科助教。東京大学医学部山岳部の監督、涸沢診療所の所長（夏季限定山岳診療所）も兼任。さまざまな伝統医療、補完代替医療、民間医療への造形も深い